



2003年2月15日発行

第41号

発行人

ジェームス・サック

発行所

ルーテル学院大学附属

人間成長とカウンセリング研究所

三鷹市大沢3-10-20

TEL 0422-31-7830

人生の終わりのケア

ルーテル学院大学教授 ジェームス・サック
人間成長とカウンセリング研究所所長

創立の時から人間成長とカウンセリング研究所 (PGC) は、基本的なカウンセリング技法を、ルーテル学院大学と日本ルーテル神学校、および一般社会人に教えることに力を注いできました。この教育のみならず、全てのPGCの活動は、キリスト教という土台に立って行われるべきだと考え、クリスチャン、ノンクリスチャンの区別なく、全ての人々のニーズを満たすことを大切にするとともに、福音を伝えることをも大切にしています。福音のメッセージは、我々人間は神のイメージで作られているので、神の目から見て計り知れないほどの価値を持っているというものであり、ヒーリング・センターとしてのPGCは絶えずイエス・キリストを通して人々に愛・受容・許しそして平和を提供することが使命とされています。

1997年より、PGCは死別を経験された人々のために、大人向けの「身近な人を亡くした思いを語り合う会」と、子ども向けの「だいじな人をなくした子どもの集まり」というサポート・グループをしてきました。このミニストーリーはとても重要なサービスだと信じているので、これからはこの面の働きを強めていきたいと思っています。だんだんと日本人は死別者のニーズを認めて受け入れるようになってきています。過去には、このニーズやそれに伴う感情は、公共の場から隠されてきました。現在は自分の苦しみや悲しみを援助者と分かち合うことの価値とその援助が認められるようになってきました。よく知られているように、日本は急速に高齢化社会になってきました。それ故、死と生の意味はわれわれの重要な課題であり、これからもその重要さは増していくと思われます。

昨年、私と妻のキャロルは、アメリカのモンタナ州に

おいての2年間のサバティカルを終えて帰ってきました。妻は“Chalice of Repose Project” (「安らぎの杯」の意) で music-thanatology (音楽による看取りへのケア) を学び、修了しました。music-thanatologyとは、ハーブと歌による処方的音楽を使って死にゆく人を慰めるというものです。患者さんの生理機能(呼吸・皮膚の色・体温など)を観察して、患者さんの慰めになるような音楽を選びます。この音楽による看取りへのケアは、具体的には、人間的に恵まれた安らかな死を迎えることができるように援助するということです。



私はこれからのPGCでは、“End-of-life-care” (人生の終わりのケア) のプログラムに時間と力を注ぎたいと思っています。死にゆく人とその家族のためのミニストーリーで、「死にゆく人と残された人へのケア」といいます。具体的には、音楽による看取りへのケアで、死にゆく人の所に出向いて、その人と残される人に寄り添ってケアすることです。私は死を前にした患者さんとその家族を慰めるミニ

ストーリーと、死後残された人がその現実に適応できるような援助へと自然に結び付けていくことに力を注ぎたいと思っています。このミニストーリーは、イエス・キリストの愛を通して、全ての人のための働きだと確信しています。

新約聖書のコリントの信徒への手紙Ⅰの15:54~57には、「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。「死は勝利に呑み込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前の棘はどこにあるのか。……私たちの主イエス・キリストによって私たちに勝利を賜る神に感謝しよう」